

(別紙様式3)

令和2年3月31日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 佐賀市城内一丁目1番59号  
管理機関名 佐賀県教育委員会  
代表者名 教育長 落合 裕 二

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成31年4月1日（契約締結日）～令和2年3月31日

#### 2 指定校名

学校名 佐賀県立佐賀農業高等学校  
学校長名 久富 光祐

#### 3 研究開発名

農業高校の専門性を活かした農業分野のグローバル・リーダーを育成する教育課程の開発

#### 4 研究開発概要

グローバルな農業問題について、地域と外国の農業事情を比較しながら課題を発見し、他者と協働して課題解決を目指す取組を通して、グローバルな素養を身に付けさせるとともに、この研究の充実に資するよう、農業高校の強みである専門性を最大限に活かしながら、語学力や論理的思考力等を育成すること、また、ICTを適切に利活用することによって主体性や情報発信能力を育成することを目的として、次の研究開発単位を設定し、研究開発を行った。

**研究開発Ⅰ「生徒協働型の教育プログラムの開発」**

**研究開発Ⅱ「教科分業型の教育プログラムの開発」**

**研究開発Ⅲ「ICTを利活用した主体的・協働的学習支援プログラムの開発」**

いずれも、佐賀大学をはじめとした関係機関と連携し、農業高校の専門性を活かして、生徒が意欲的にプログラムに参加できる場面を設定した。なお、**研究開発Ⅰ**は課題研究での取組、**研究開発Ⅱ・Ⅲ**は課題研究以外での取組として実施した。

## 5 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	(月)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
①SGH関連行事, 会議等での指導等	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②SGH運営指導委員会での指導等					○					○			
③円滑な事業推進のための支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④英語教員, ALTの配置等の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤体験的英語活動の支援				○	○								
⑥海外研修への支援								○			○		
⑦学校交流への支援	○			○				○					
⑧ICT利活用教育における支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑨成果普及のための取組					○				○	○			○

### (2) 実績の説明

#### ① SGH関連行事, 会議等での指導等

指定校で開催される, SGH関連の学校行事や会議等, また, 運営指導委員会や成果発表会等の打ち合わせにおいて, 円滑かつ効果的な事業推進のための指導・助言等を行った。

#### ② SGH運営指導委員会での指導等

SGH事業全体に対する客観的かつ中立的な評価・検証を行うためにSGH運営指導委員会を設置した。本年度は2回委員会を開催(8月, 12月)し, 多面的・多角的な視点から大学関係者や有識者の指導・助言を受けた。

#### 【令和元年度 SGH運営指導委員】

氏名	所属及び職名等
岡本 正宏(座長)	九州大学 総長特別顧問 名誉教授
吉田 健	JETRO 佐賀貿易情報センター 所長
田中丸 土男	田中丸ガーデン 代表取締役 佐賀県国際農友会会長
富吉 賢太郎	学校法人佐賀清和学園 理事長
吉川 一郎	佐賀銀行 地域サポートグループ長
鄭 紹輝	佐賀大学 農学部 教授

#### ③ 円滑な事業推進のための支援

常勤講師(理科, 農業科の兼務)1人を配置した。また, 会計事務等の負担軽減及び外部関係機関との英語による連絡調整を担当する非常勤職員1人を配置した。

#### ④ 英語教員, ALTの配置等の支援

効果的な事業推進のために必須である, 核となる英語教員の配置については, 指導力を有する教員を配置することに加え, 常勤講師を1人加配する支援を行った。ALTの配置については, ベース校として配置することで派遣日数を増やし, 生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成を支援した。

⑤ 体験的英語活動の支援

生徒が日頃の授業で学んだ英語を実際に使用する研修会である、イングリッシュ・デイ(7月, 生徒 64 人参加)へ 4 人の A L T を派遣した。また, ハウステンボス英会話体験プログラム(8月, 生徒 40 人参加)を提供し, 英語力の向上, 学習意欲を高める支援を行った。

⑥ 海外研修への支援

農業関連の現地視察及び語学研修を目的としたシンガポール農業・語学研修(1月, 生徒 22 人参加)に経費の一部助成の支援を行い, 佐賀県高等学校教育研究会農業部会が実施するオーストラリア海外研修(10月, 生徒 2 人参加)にも経費の一部助成の支援を行った。

⑦ 学校交流への支援

指定校は佐賀県国際課の主催事業により, 交流協定を締結している全南生命科学高校(韓国・全羅南道)との相互交流を平成 24 年度から継続しており, 本年度は 8 月に全南生命科学高校への派遣(生徒 2 人)を行った。

⑧ I C T 利活用教育における支援

I C T を利活用した主体的・協働的学習支援プログラムの研究・開発を支援するために, I C T 環境の整備や学習用 P C の貸与を行った。

⑨ 成果普及のための取組

- ・県主催の教育課程講習会で研究開発内容の発表の場を設定し, 県内の教員に指定校が取り組んでいる探究学習活動に係る啓発を行った(8月)。
- ・12月に実施した成果発表会で, 参加者が S G H の取組についてより理解が深まるように, 資料内容や発表会の構成等についての助言を指定校に対して行った(11月, 12月)。
- ・「中等教育資料」の外国語教育特集号に指定校の英語教育の取組が紹介されるように調整等を行い, 令和 2 年 3 月号に掲載された(3月)。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

研究開発Ⅰ「生徒協働型の教育プログラムの開発」に関する取組

業務項目	実施日程												
	(月)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
① S G 講演会			○	○	○		○	○		○	○		
② グループ型探究活動 1年「S G 農業と環境」			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
③ グループ型探究活動 2年「S G 課題研究」		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
④ グループ型探究活動 3年「S G 課題研究」		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑤ 1次・2次発表会									○	○			
⑥ レポート作成										○	○	○	
⑦ 外国人講師による課題研究の英語プレゼンテーション基礎セミナー					○	○				○		○	
⑧ 外国人留学生及び外国人農業研修生等と農業事情について英語での交流会		○	○		○	○							
⑨ 外部検定試験を用いた課題研究における英語力向上への取組			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

研究開発Ⅱ・Ⅲに関する取組については, 原則, 各科目のカリキュラム内で随時実施した。

## (2) 実績の説明

### 研究開発Ⅰ「生徒協働型の教育プログラムの開発」に関する取組(課題研究での取組)

#### ① SG講演会

- ・全校生徒(352人)対象1回, 1年生(119人)対象3回, 1年生農業科学科(40人)対象2回, 2年SG選択者(33人)対象2回の計8回実施した。

#### ② グループ型探究活動 1年「SG農業と環境」

- ・1年生(119人)を対象とし, 「SG農業と環境」(3単位)を中心に実施した。
- ・実施内容は, オリエンテーション(年度当初), SG講演会(計5回), 地域農業の課題についての情報収集(5月~6月), 研究テーマの設定(7月), 国内フィールドワーク(7月~10月), 学科別中間報告会(9月), 発表用ポスター作成(9月~11月), 中間発表会(11月), 成果発表会(12月), レポート作成(1月~2月), 学科内での研究内容の共有(2月)等である。
- ・主なテーマは, 「持続可能な農業, スマート農業, 有機農業, 後継者不足問題」(農業科学科), 「食品ロス削減, 循環型農業」(食品科学科), 「ダム, クリーク, 利水, 治水, 外来種」(環境工学科)等である。

#### ③ グループ型探究活動 2年「SG課題研究」

- ・2年SG選択者(33人)を対象とし, 「SG課題研究」(2単位)で実施した。
- ・実施内容は, 1年生への活動紹介(年度当初), 研究テーマの設定(年度当初), SG講演会(計2回), 外国人留学生との交流会(5月), 海外フィールドワーク事前学習会(7月), 海外フィールドワーク(8月), 発表用資料作成(9月~12月), 中間発表会(11月), 成果発表会(12月), レポート作成(1月~3月)等である。

#### ④ グループ型探究活動 3年「SG課題研究」

- ・3年SG選択者(31人)を対象とし, 「SG課題研究」(2単位)で実施した。
- ・実施内容は, 1・2年次の研究内容の総括(年度当初), 研究テーマの設定(年度当初), 国内フィールドワーク(7月~10月), 発表用資料作成(9月~12月), 成果発表会(12月), レポート作成(12月~2月)等である。

#### ⑤ 1次・2次発表会

- ・指定校主催の1次発表会(中間発表会)を実施し, 1年生(119人), 2年SG選択者(33人)が発表を行った(計2回, 11月)。
- ・指定校主催の2次発表会(成果発表会)を実施し, 1年生(119人), 2・3年SG選択者(64人)が発表を行った(12月)。

#### ⑥ レポート作成

- ・1年生(119人), 2・3年SG選択者(64人)がレポートを作成した(12月~2月)。

#### ⑦ 外国人講師による課題研究の英語プレゼンテーション基礎セミナー

- ・1年生(31人), 2・3年SG選択者(64人)を対象に, ALTや外国人非常勤講師を講師として, プレゼンテーション基礎セミナーを実施した(計10回, 7月~2月)。

#### ⑧ 外国人留学生及び外国人農業研修生等と農業事情について英語での交流会

- ・3年SG選択者(20人)を対象に, 台湾の農業高校に在籍する生徒(9人)と, 農作物収穫, 食品製造実習を行って交流を深め, SGHの取組についても意見交換を行った(4月)。
- ・2年SG選択者(33人)を対象に, 佐賀大学に留学しているスリッパリーロック大学(アメリカ合衆国)の学生(12人)と農作物収穫, 食品製造実習を行って交流を深め, SGHの取

組についても意見交換を行った(5月)。

- ・ 2, 3年SG選択者(64人)を対象とし、県教育委員会の主催事業であるイングリッシュデーを実施した(7月)。県内のALT4人と、グローバルなトピックについて意見交換を行い、ビーガン食の試食会も実施した。
  - ・ 身に付けた英語による発信力を試す場として、2年生希望者(40人)が、県教育委員会の主催事業である英会話体験プログラムに参加した(8月)。
  - ・ 海外フィールドワークに参加した2年SG選択者(30人)を対象とし、交流協定を締結している全南生命科学高校を訪問して交流会を実施した(8月)。両校で実施している課題研究についてプレゼンテーションを行い、全南生命科学高校の生徒32人と、食品ロス問題についてディスカッションを行った。
- ⑨ 外部検定試験を用いた課題研究における英語力向上への取組
- ・ 全校生徒(352人)を対象に、GTECを受検させた(年2回)。
  - ・ 試験結果を検証し、授業において、特にライティングの強化に取り組んだ。

#### 研究開発Ⅱ「教科分業型の教育プログラムの開発」に関する取組

① 英語科の取組

- ・ 1・2年生(238人)、3年SG選択者(31人)を対象に、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」等の授業において、英語による表現力・発信力の向上を目指すプログラムの開発を行った(年間を通して実施)。

② 国語科の取組

- ・ 全校生徒(352人)を対象に、「国語総合」等の授業において、批判的思考力や表現力の向上を目指すプログラムの開発を行った(年間を通して実施)。

③ 地理歴史科の取組

- ・ 1年生(119人)、2年生(79人)、3年生(39人)を対象に、「世界史A」、「地理A」等の授業において、複合的視座を育成するプログラムの開発を行った(年間を通して実施)。

④ 全教科での取組

- ・ 上記を含めた全教科(数学科、理科、保健体育科、家庭科、情報科)で、グローバル・リーダーとして必要とされる汎用的な能力の育成を目指した授業を実践した(年間を通して実施)。

#### 研究開発Ⅲ「ICTを活用した主体的・協働的学習支援プログラムの開発」に関する取組

- ① 1年生(119人)を対象に、「農業情報処理」の授業において、「課題研究」を想定した系統的な授業を実践し、情報リテラシーの向上を目指した取組を行った(年間を通して実施)。
- ② 全校生徒(352人)を対象に、学習用PCや電子黒板などのICT機器及び学習用ソフトを活用した授業等を実践した。また、学習用PCを活用して、ポートフォリオや学習記録を作成させ、主体的な学習の支援を行った(年間を通して実施)。
- ③ 「課題研究」における協働学習を支援するために、ICTの環境整備に関する検証を行った。

### <成果普及のための取組>

① 指定校主催の発表会の開催

SGH中間発表会(11月)、SGH成果発表会(12月)を開催し、口頭発表、ポスター発表、研究協議などを行い、研究開発の成果を発信した。

② 学校HPによる広報

定期的にホームページを更新し、情報発信を行った。

③ SGH通信の発行

SGH活動をまとめた「SGH通信」(A3サイズ)を4回発行した。指定校の学校通信とともに地域の中学校へ配布してクラス掲示を依頼した。

④ 地域に向けた発信

県、町、地域コミュニティ、各団体が主催する各種大会・発表会に参加し、指定校の研究開発内容の紹介や、食品ロス削減のための提案を行った(計23回)。

⑤ 各種発表会への参加・発表

県外で開催された各種発表会や学会へ参加し、指定校の研究開発内容について発表を行った(計5回)。

⑥ テレビ・新聞等による報道や紹介

NHK佐賀、サガテレビ、NHK福岡、地元ケーブルテレビ、佐賀新聞、読売新聞等で指定校のSGH活動について報道された(計13回)。また、「中等教育資料」の外国語教育特集号(令和2年3月号)に指定校の英語教育の取組が掲載された。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

### (1) 目標の進捗状況

構想調書に挙げた【指定4年目】の研究開発の各項目については、次のような進捗状況であった。(○：計画通り進捗した、△：一部できなかった、×：ほとんどできなかった)

- |   |   |
|---|---|
| ① 全体計画について過去3年間の研究内容の検証と改善点の明確化         | ○ |
| ② 「学校設定科目」の過去3年間の実施を踏まえたカリキュラムの検証       | ○ |
| ③ 『教科分業型の教育プログラム』の過去3年間の実施を踏まえた検証       | ○ |
| ④ 『ICTを活用したプログラム』の過去3年間の実施を踏まえた検証       | ○ |
| ⑤ 高大・産学連携(課題研究)の過去3年間の活動を踏まえた検証         | ○ |
| ⑥ 高大・産学連携(課題研究)の実践・発表を踏まえた3カ年の評価及び改善    | ○ |
| ⑦ SGH成果の普及活動について過去3年間の検証                | ○ |
| ⑧ 海外研修の実施及び検証                           | ○ |
| ⑨ SGH対象校との情報交換・意見交換                     | ○ |
| ⑩ SGH運営指導委員会の年2回開催                      | ○ |
| ⑪ スーパーグローバルハイスクール実践内容紹介ホームページ追加及び改善     | ○ |
| ⑫ 生徒・職員・保護者・SGH卒業生に対するアンケート・意識調査と3カ年の検証 | ○ |
| ⑬ 4年次報告書の作成                             | ○ |

### (2) 成果

「生徒協働型の教育プログラムの開発」では、全学年・全学科で統一したルーブリック評価を行ったことで、生徒の変容を客観的に把握することが可能となり、課題研究を中心とし

た農業分野のグローバル・リーダーを育成する教育課程の開発がより充実したものとなった。

「教科分業型の教育プログラムの開発」では、国語科・英語科・地理歴史科をはじめとした全教科が連携し、グローバル・リーダーとして必要とされる汎用的な資質・能力の育成を目指した教科横断的なプログラムの枠組みを確立して、効率のかつ効果的な授業を実践することができた。

「ICTを活用した主体的・協働的学習支援プログラムの開発」では、従来の取組に加え、学習用PCを用いた効果的な取組を実践してプログラムを充実させることができ、協働学習支援のためのICT環境整備に関する検証も行った。

指定校生徒が抱える課題として、主体的な行動力、論理的・批判的思考力、国際的な視野、英語力、レポート・論文の作成力、プレゼンテーション力等が挙げられる。これらの資質や能力の育成・向上を目指した各プログラムの開発と教育実践により、生徒がどのように変容したかを検証するため、毎年度、全校生徒を対象に「国際化・情報化に関するアンケート」を実施している。アンケートでは、35項目の質問について5段階(5：大いに当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらとも言えない、2：あまり当てはまらない、1：全く当てはまらない)で回答させた。このうち、上記の課題に関連する質問項目について、3年SG選択者(31人)の入学時からの自己評価の結果を経年比較した。

(平成29年度入学生の評価平均の推移) ※3年SG選択者(31人)の1年次からのデータ

質問項目	評価平均			
	1年次 年度始	1年次 年度末	2年次 年度末	3年次 年度末
ア 主体性・協働学習・論理的思考 ・主体的に学習に取り組んでいる。 ・グループの仲間と協働して学習を進めることができる。 ・論理的で説得力のある結論を出すことができる。	3.35 3.52 3.00	2.74 2.10 2.71	3.68 3.97 3.26	3.65 4.26 3.81
イ 国際的視野・英語コミュニケーション ・本校の教育活動が国際的視野を広めるのに役立っている。 ・英語を使って外国人と会話することができる。 ・英語を使って外国人と議論することができる。	3.32 1.61 1.23	2.39 3.81 4.42	4.06 3.10 2.26	4.19 3.45 2.71
ウ ICTリテラシー ・インターネットの情報から正しい情報を選ぶことができる。 ・発表においてICT機器を効果的に利用することができる。 ・ICT機器を利用してレポートや論文を作成することができる。	3.65 2.74 2.52	2.03 2.71 2.06	3.87 3.87 3.68	4.39 4.32 4.16

入学時と比較して、3年次年度末では、どの項目もその評価平均値が高くなっており、生徒の資質・能力の育成において、SGH事業が一定の成果を挙げていると考えられる。特に、1年次年度末から2年次年度末にかけて、ほとんどの項目の評価平均値が大きく上昇し、3年次年度末においても、高い自己評価を維持している。2年次の海外フィールドワークや課題研究などのSGH事業の取組によって、学習や各種活動に対する生徒の意欲は確実に高まっており、目指す生徒の育成が図られつつあることを示している。

また、「英語を使って外国人と会話すること・議論すること」は、入学時に極めて低かった自己評価が1年次年度末にかけて大幅に高くなっている。このことは、単位数増加や授業内容の改善によって、生徒の英語への苦手意識を軽減させ、自信をつけさせることができたことを示している。しかし、海外フィールドワークや語学研修、外国人との交流会を経

験した後の2年次年度末では、評定平均値が下降している。これは、英語学習に対する生徒個人の目標が高くなった結果であると考えられ、2年次の様々な経験を通して、指定校のSGH事業が国際的視野の広がりによって役立つと評価する生徒が多くなっているだけに、英語運用能力の向上に関する取組の更なる改善が必要である。なお、3年次年度末には、評定平均値が2年次年度末と比べて上昇しており、外国語によるコミュニケーション能力に自信ができてきた結果であると考えられる。

### (3) 評価

指定校教職員に対するアンケートによりSGH事業の評価を行った。以下のそれぞれの項目について5段階(5：大いに当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらとも言えない、2：あまり当てはまらない、1：全く当てはまらない)で回答した(教職員53人対象)。どの項目もおおむね高い評価が得られ、指定校のSGH事業が順調に進捗していると判断できる。

質問項目	評価平均
ア 生徒の変容	
・グローバルな社会課題に対する問題意識は育成された。	3.81
・国際社会で通用する汎用的能力は身に付いた。	3.28
・国際的な諸課題を解決する行動力や実践力は育成された。	3.60
・学力・学習意欲が高まった。	3.92
・国際的な活躍を目指す進路(大学・海外大学・留学)を希望する生徒が増えた。	3.72
イ 教師の変容	
・生徒の興味・関心や取組について理解が深まった。	3.87
・生徒のグローバルな社会課題に対する問題意識を高める工夫がなされた。	3.92
・生徒の汎用的能力を身につけさせるための工夫がなされた。	3.65
・生徒の国際的な社会課題を解決する行動力や実践力を身につけさせる工夫がなされた。	3.69
・研究開発に対する教員間の連携・協力・指導體制は適切であった。	3.50
・教員の大学や企業、国際機関等との人的ネットワークは適切であった。	3.57
ウ 保護者の変容	
・SGH事業の趣旨に対する保護者の賛同や協力が得られている。	3.96
・SGH事業の研究発表会や広報誌等によって、教育活動を理解している。	3.73
・学校や教員に対して、信頼感を持っている。	3.77
・生徒とともにグローバルな社会課題に対する興味・関心を持っている。	3.35
エ 学校の変容	
・SGH事業の公開授業や交流会、研究発表会が計画的に実施できた。	4.06
・SGH事業の研究公開や広報誌等を利用して研究成果を発表した。	3.75
・模擬国連やビジネスプログラムコンテストなどの、グローバルな社会課題又はビジネス課題に関する公共性の高い国内外の大会に積極的に参加した。	3.81
オ 管理機関の変容	
・本校のSGH事業を通して県全体のグローバル・リーダー育成に取り組んだ。	3.37
・本校のSGH事業を積極的に支援し、成果普及に協力した。	3.37
カ 大学・企業・国際機関等	
・連携する大学・企業・国際機関が高校の教育活動に興味・関心をもち、積極的に支援した。	3.73

## 8 次年度以降の課題及び改善点

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

課題研究に関する科目は、SGH指定前は「課題研究」(3年生全員必修：2単位)のみであったが、SGH指定後、以下のように教育課程を変更した。

<p>&lt; S G H指定前 &gt; 【合計単位数 2 単位】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「課題研究」（3 年生全員必修：2 単位）</li> </ul>
<p>&lt; S G H指定後 &gt; 【合計単位数 5～7 単位】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「S G 農業と環境」（1 年生全員必修：3 単位）</li> <li>・「S G 課題研究」（2 年生 S G 選択者：2 単位）</li> <li>・「S G 課題研究」（3 年生 S G 選択者：2 単位）</li> <li>・「課題研究」（3 年生 S G 選択者以外：2 単位）</li> </ul>

1 年次は、講演会や国内フィールドワークを通して「地域の農業事情の研究」を行う。また、2 年次は、外国人留学生との交流会や海外語学研修によって、グローバルな見方・考え方を身に付けさせるとともに、海外フィールドワークを通して「外国の農業事情の研究」を行う。そして、3 年次にはこれまでの研究をもとに「地域と外国の比較による課題解決の研究」を行い、双方に有益な農業振興策を提案することを目標とした。

このように、S G コースを選択した生徒は、3 年間を通して探究的な学習に取り組むことができるようになり、グローバル・リーダーに資する継続的な授業実践が可能となった。

## (2) 高大接続の状況について

指定校は S G H 指定初年度から、佐賀大学農学部との継続した連携を行っており、農業事情に関する講演会、海外フィールドワークについての指導・助言、大学院生からのピア・サポートなど課題研究全般にわたる支援を受けている。また、佐賀大学への留学生との交流会も毎年開催しており、生徒の英語運用能力の向上につながっている。

S G H 指定 3 年目からは、九州大学大学院農学研究院との連携により、研究内容に関する講義や課題研究についての指導・助言を受けている。

このような様々な立場の人々との協働学習を通して、生徒の「知識・技能」の習得はもちろん、問題解決型学習の各場面で必要とされる「思考力・表現力・判断力」や学習活動に対する「主体性」が十分に育成されており、高大連携の効果が十分に表れていると言える。

なお、大学の単位履修制度は未設置であり、高大連携協定については今後検討していきたいと考えている。

## (3) 生徒の変化について

指定校は、農業分野の専門性を活かして地域や社会に貢献できる有為な人材(農業従事者や土木系公務員、農業関連企業への就職者)の育成を目標とし、長年、地域の農業高校としての役割を担ってきた。農業をはじめとする地域の問題にも目を向け、地域の園児や小・中学生への食農教育(田植え、稲刈り、作物収穫、食品製造、動物ふれあい活動)や、地域特産物を使った商品開発など農業科の専門性を活かした活動を実践している。

S G H 指定以前の生徒は、日頃の学習や実習に対して意欲的ではなく、上記のような活動にも受動的な姿勢で取り組む生徒が多かったが、S G H 事業に関する様々な取組を通して、生徒は大きく変容した。

まず、学習に対して主体的に取り組む生徒が増え、学力が大幅に向上した。特に、英語力向上のための多様な指導によって英語学習への関心と意欲が高まり、実用英語技能検定試験の受検者や合格者が増えている。今年度は、初めて生徒 1 名が実用英語技能検定試験準 1 級に合格した。次の表は実用英語技能検定試験合格者数の推移である。

< 実用英語技能検定試験合格者数の推移 >

	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度
準1級	0	0	0	0	0	1
2級	0	0	0	2	2	2
準2級	1	1	5	7	13	9
3級	8	5	20	41	10	22

また、SGH事業を通してグローバルな問題意識が高まり、地域のみならず海外にも目を向ける生徒が増えた。海外留学、海外研修に参加する生徒も大幅に増加した。次の表は海外留学者数および海外研修参加者数の推移である。

< 海外留学数、海外研修参加者数の推移 >

	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度
海外留学	2 韓国 2	3 韓国 3	4 韓国 2 アメリカ 1 オーストラリア 1	2 韓国 1 アメリカ 1	4 オーストラリア 2 アメリカ 1 ニュージーランド 1
海外研修	11 韓国 8 オーストラリア 3	31 ベトナム 16 韓国 10 オーストラリア 5	52 ベトナム 25 シンガポール 21 オーストラリア 3 韓国 2 オランダ 1	53 ベトナム 30 シンガポール 16 韓国 4 オーストラリア 2 ニュージーランド 1	58 韓国 32 シンガポール 22 オーストラリア 2 アメリカ 1 中国 1

さらに、課題研究で取り組んだ分野を専門的に学び、国際的な課題の解決に貢献したいと考える生徒が増え、進学率が向上した。次の表は国公立大学合格者数の推移である。SGH指定初年度の平成28年度に入学した生徒の合格実績は過去最高となっており、直近2年は、スーパーグローバル大学(SGU)にも合格している。

< 国公立大学合格者数の推移 >

	H27 年度 (H25 入学生)	H28 年度 (H26 入学生)	H29 年度 (H27 入学生)	H30 年度 (H28 入学生)	R 元年度 (H29 入学生)
合格者	1 佐賀大学 1 (農)	2 佐賀大学 2 (農)	0	8 佐賀大学 6 (農・工) 熊本大学 1 (文) 宮崎大学 1 (農)	3 佐賀大学 2 (農) 熊本大学 1 (文)

(4) 教師の変化について

指定校では、SGH指定以前から、3年次「課題研究」(2単位)において、様々な農業問題をテーマとした研究を実践してきた。しかし、例年と変わらない研究テーマや研究内容での指導を毎年行っていた教員が多かったことで、生徒が主体的に問題解決型学習に取り組むことを促すような指導が十分には行えておらず、教員間の連携や協力も十分ではなかった。

しかしながら、SGH指定により、教員の指導に対する考え方が大きく変わった。研究開発を進めていく中で、自らの指導を省みながら、より高いレベルでの授業づくりを目指す教員が増えた。生徒のグローバルな社会課題に対する問題意識を高めるために、3年間を通じた指導の工夫が必要であると考え、課題研究に関わる農業科の教員が連携し、定期的な研修や意見交換を行った。また、農業科の教員だけでなく、普通教科を担当する教員も、グローバル・リーダーとして必要とされる汎用的な能力の育成に向け、多様な取組を検討し実践した。このような教員の変化は、学習に対する生徒の主体性を高めることにつながり、生徒に刺激を与えている。生徒もこれに応えるべく、学習面で成果を上げている。

今後も研究開発に対する教師間の連携や協力を深め、全職員での指導体制を確立したい。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業，保護者等）

SGH指定後は、各教科の授業においても、生徒が協働して活動する時間を増やし、主体的に学習する生徒の育成につなげており、授業で学習用PCや電子黒板などのICT機器を活用する場面が大幅に増えている。このことで生徒は、主体的・協働的な学習をより一層深まった形で行うことができている。

また、SGH指定後は、SGH事業への参加を希望して指定校を志願する中学生が増加した。このことで、入学時から高い意欲で学習に臨む生徒がSGH指定前と比べて多くなった。保護者からは、経費面等、指定校のSGH事業に対する理解をいただいている。

(6) その他の課題や問題点について

前年度からの課題である「学科間連携の強化」に向け、「持続可能な地域農業の実現」を共通テーマとして研究を行った。このことで、3つの学科(農業科学科，食品科学科，環境工学科)の連携は密になったが、研究内容の面で、各学科における「専門性の深化」という点においては、これまでと比べて満足する成果が得られなかった。次年度は、これらの両立を目指していきたい。

(7) 研究開発完了後の持続可能性について

今年度から、SGH事業終了後の自走に向け、育成したい生徒像やカリキュラム等について校内で継続した検討を行ってきた。これまでのSGH事業の成果を踏まえ、グローバル・リーダーとして必要とされる汎用的な能力を育成するため、令和2年度入学生からは、全生徒が3年間継続して探究的な学習に取り組めるカリキュラムを設定した。今後は教科横断的な授業を実践しながら、生徒の汎用的な能力の育成に繋げていく必要がある。

また、海外フィールドワークの継続については、経費面の課題があるため、修学旅行に代わる取組としての実施や関係機関への支援要請等の工夫をするという方向で、現在検討を進めているところである。